

## 言葉に関する発達理解と保育実践のつながりを

### 意識した領域「言葉」の指導法の有効性(1)

—模擬保育の振り返りに着目して—

塚越 亜希子・松尾 由美

#### 1. はじめに

少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化、共働き家庭の増加など社会状況の変化とそれに伴う子どもの育ちに対する様々な課題が顕在化する中、2017年3月に、幼稚園教育要領<sup>1)</sup>、保育者保育指針<sup>2)</sup>、幼保連携型認定こども園教育保育要領<sup>3)</sup>が改訂(改定)された。今回の改訂(改定)では、幼児教育は学校教育の始まりとして、子どもたちが社会的変化を乗り越え豊かな人生を切り拓くことができるようにするための基礎を培うものであると、これまで以上に重要な位置づけがなされた。<sup>4)</sup> また、今回の改訂(改定)では幼児教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が10項目にわたり明確化された。これらの姿は幼児期の特性から、子どもの自発的な活動としての遊びや生活などの体験を通して育まれていくものであり、保育者にはこの10の姿を念頭において子どもの姿を捉え、一人一人の発達に必要でふさわしい体験が得られるような計画の作成、環境の構成、保育の実践が求められている。さらに、保育の質を向上させていくためには、計画に基づく実践を振り返り、評価し、その結果を次の計画へ反映させていく力が必要とされる。

そのような中、保育教諭養成課程研究会(2017)<sup>5)</sup>は、保育者に多様な専門性が求められていることを踏まえると、養成段階においてはこれからの時代の保育者の資質を明らかにした上で、養成段階から現職段階への一貫した理念に基づいてその資質の向上を図り、長期的かつ総合的な視野をもって養成にあたる必要があるとしている。このことから、いかに養成の段階で保育者に求められる力の素地を育むかは重要な課題であり、そのための授業をどのように展開すべきかが保育者養成校の教員には問われている。

そこで本稿では、領域「言葉」の指導法の一つとして、言葉に関する発達理解と保育実践のつながりに意識を向け、さらに保育の質向上のために保育者に求められる「計画に基づいて保育を実践し、それを振り返り、評価し、その結果を次へと

つなげていく力の形成」をめざして授業に模擬保育を取り入れた領域「言葉」の授業実践について報告する。そして、学生の模擬保育後の振り返りに着目してその有効性について検討する。

## 2. 保育内容「言葉」の検討

保育者養成課程における保育内容「言葉」の授業は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示されている領域「言葉」がめざす「経験したことや考えたことなどを自分の言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ということがどのようなことなのかを子どもの発達に合わせて理解し、子どもの「言葉」の育ちをいかに育てていくのかを考え、その保育の内容について学ぶものである。

2016年に教育職員免許法が改正、続く2017年に同法施行規則が改正されたことにより教職課程の見直しが図られ、2019年から新しい教職課程の実施が開始された。それに合わせ保育者養成課程も新たな考えのもと、5領域の着実な実践力をもった保育者の養成をめざし、幼児教育の「何をどのように指導するか」の「何を」の部分で「領域の専門的事項」とし、また「どのように」の部分で「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」とし科目が区分された。このように「領域論」と「指導法」に分けられたことにより、各養成校がめざす保育者像に応じて教職課程を創意工夫できるような編成となった。

本稿で報告する保育内容「言葉」は経過措置により旧課程のまま実施の科目であるため「何を」「どのように」指導するかを15回の授業内で網羅する必要がある。本授業は2年次後期開講の科目であることから、学生の保育職への就職を見据えてこれまでの実習や他の科目での学びを統合させながら、保育者としてどのように指導するかを具体的に考える力を身につけて欲しいと考えた。そこで、教職課程コアカリキュラムに位置付けられている「保育内容の指導法」の一般目標である「幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける」を意識し、その到達目標の一つとして「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」と示されていることから、授業に模擬保育を取り入れることにした。

### 3. 授業の概要

#### （1）対象と期間

本実践は、関東短期大学こども学科 2019 年度後期(2019 年 10 月～2020 年 1 月)に開講された保育内容「言葉」の授業を対象に行った。保育内容「言葉」の授業は幼稚園教諭免許状及び保育士資格取得のための必修科目で、履修者は 62 名である。

#### （2）授業計画

保育内容「言葉」は 2 年次後期開講科目であり、学生は幼稚園教育実習および保育実習を全て終えた上で受講している。そこで、学生がそれまで学んできた理論と実践を生かしつつ、さらに言葉に関する発達の理解と保育実践のつながりを意識できるように、以下のような授業計画とした。(表 1)

表 1 保育内容「言葉」の授業計画

到達目標	<p>○子どもの発達を「言葉」の視点から捉え、子ども理解を深めながら保育内容について具体的に理解する。</p> <p>○自らが立案した指導計画に基づいて教材研究および模擬保育を行い、その振り返りを通して保育を改善する視点を身に付ける。</p>
授業内容	<p>幼稚園教育要領ならびに保育者保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「言葉」の内容を踏まえて、幼児教育における言葉の教育のねらいや内容、方法について理解を図るとともに、言語教材についての考察を行う。</p>
授業計画	<p>① 幼稚園教育要領、保育者保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「言葉」</p> <p>② 言葉の役割と意義 ワークショップを通じて</p> <p>③ 講義：乳児期の言葉の発達</p> <p>④ 演習：乳児期の言葉を育てる実践</p> <p>⑤ 講義：1 歳児の言葉の発達</p> <p>⑥ 演習：1 歳児の言葉を育てる実践</p> <p>⑦ 講義：2 歳期の言葉の発達</p> <p>⑧ 演習：2 歳期の言葉を育てる実践</p> <p>⑨ 講義：3 歳児の言葉の発達</p> <p>⑩ 演習：3 歳児の言葉を育てる実践</p> <p>⑪ 講義：4 歳児の言葉の発達</p> <p>⑫ 演習：4 歳児の言葉を育てる実践</p> <p>⑬ 講義：5 歳期の言葉の発達</p> <p>⑭ 演習：5 歳期の言葉を育てる実践</p> <p>⑮ 特別な配慮が必要な乳幼児</p>

本授業は幼児教育学を専門とする第一著者（塚越）と心理学を専門とする第二著者（松尾）の2名で担当した。そのため、それぞれの専門性を生かした授業の在り方を模索し、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育、保育要領に記されている領域「言葉」のねらい・内容を踏まえ言葉の発達過程と子どもの言葉を育むための援助方法について事例や映像を活用して学ぶ講義（担当：松尾）と講義を通して学んだ知識を生かして模擬保育を行う演習（担当：塚越）を交互に取り入れ、そのつながりを意識させたことに大きな特徴がある。

#### 4. 模擬保育の実施方法

##### (1) 模擬保育を実施するにあたっての課題

乳幼児の言葉の発達については個人差も大きく一律に年齢で区切ることはできない。しかし、保育者の基本的な知識として言葉の発達を段階的に知り、乳児期からの様々な経験の積み重ねが言葉の基礎となってその育ちが保障されていくということ踏まえて指導の計画を立案することは見通しをもった連続性のある保育を実現するために非常に重要なことである。そこで、今回は学生に言葉の発達段階を分かりやすく、また、保育現場のクラス編成を意識しながら模擬保育に臨めるよう上記に示した授業計画のように敢えて言葉の発達を年齢で区切って指導することにした。そして、その年齢の言葉の発達の特徴を理論的に学んだ上で指導計画を立案させ、模擬保育を行うことで理論をどのように実践へとつなげていけばよいか、また、子どもの実態を捉えて指導計画を立案するとはどのようなことなのかを学生が実践を通して学べる機会とした。

模擬保育の実施にあたっては、授業の3、5、7、9、11、13回目で言葉の発達について理論的に学んだ後、その学びを指導計画の立案につなげていけるよう、まずは以下のような指導計画の素案（資料1）を全員に作成させ、理論を学んだ後の課題として年齢ごとに提出を求めた。次に、履修者62名全員が1回ずつ保育者役として模擬保育に臨めるようランダムに6グループに分け、自分が模擬保育を担当する時には前述の資料1の素案をもとに部分実習指導案という形で子どもの言葉の育ちをねらいとする指導計画を立案させた。

模擬保育の担当となった学生は自らが立案した指導計画に基づいて教材研究を行い、模擬保育を実施するにあたって必要な教材、教具についても計画に従って自分で準備するよう事前に周知した。この模擬保育のために新たに教材を作成した学生もいれば、他の授業でこれまでに作成した教材、実習で活用した教材を活用する

学生も見られた。

【資料 1】 指導計画の素案

子どもの言葉の発達を促す指導計画を立てよう！

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ 歳児

○言葉の発達に関する実態…今、どういう姿が見られるか。

---

---

---

---

---

↓

ねらい…言葉に関してどういう姿に育てたいのか。(心情・意欲・態度)

---

内容…ねらいを達成するために子どもに経験してほしい活動

---

↓

必要な教材・用具	環境面

予想される子どもの姿…あなたの考えた活動がどのように展開されるか。

---

---

---

---

---

---

---

---

↓

必要な援助の留意点…予想される子どもの姿から、援助をする時にどのような留意が必要か。

---

---

---

---

---

---

---

---

(2) 模擬保育の実施と他者評価および自己の振り返り

模擬保育は言葉の発達について理論的に学んだ次の授業回である 4、6、8、10、12 回目に実施した。(図 1・図 2) 保育者役となった学生以外は「子ども役」と「保育を観察する役」の二つに分け、「子どもの立場で保育を評価する機会」と「保育を客観的に捉えて評価する機会」を作った。なぜなら、子どもの立場になって保育を受けることで見えてくる改善点と、客観的に保育者と子どもの反応を見ることで見えてくる改善点があると考えたからである。子ども役と観察する役は毎回交代するようにし、子ども役、観察役ともに以下のような評価用紙(資料 2)を配布しそれぞれの模擬保育を評価させた。



領域「言葉」の指導法の有効性（１）（塚越・松尾）

模擬保育実施後、子ども役および観察役の学生の記入した評価表はすべて回収し、誰が評価したものか分からないようにした上で、保育者役の学生ごとにまとめて本人に配布し、全員からの評価を見ることができるようにした。そして、保育者役だった学生には、他の学生からの他者評価に加え、それに対応させた以下に示す８つの視点（表３）で自らの模擬保育を振り返らせ、保育の改善点について考えさせた。

（資料３－①②）

表３ 模擬保育の振り返りの観点

①選んだ題材（教材）について
・その年齢の子どもの言葉の発達を促すものが選べたか。
・事前準備（練習）がしっかりできたか。
②保育者としての言葉の使い方（声の大きさ・言葉遣い・話し方等）
③環境構成（子どもから見やすさや位置等）
④子どもが楽しめるような工夫について
⑤子どもの反応に対する対応について
⑥指導計画通りに進めることができたか
⑦今回の実践は、自分が立てた保育のねらいを達成できたか
⑧その他（他の人の発表と自分の実践を比べて感じたこと等）

【資料３－①】 模擬保育の振り返り表

保育内容言葉・保育実践振り返り		
学籍番号（	）氏名（	
項目	よくできたと思うところ	改善が必要なところ、こうすればよかった
選んだ題材（教材）について ・その年齢の子どもの言葉の発達を促すものが選べたか ・事前準備（練習）がしっかりできたか	理由	理由
保育者としての言葉の使い方 （声の大きさ・言葉遣い・話し方等）	理由	理由
環境構成 （子どもからの見やすさや位置等）	理由	理由
子どもが楽しめるような工夫	理由	理由
子どもの反応に対する対応	理由	理由

【資料3-②】模擬保育の振り返り表

保育内容概要・保育実践振り返り		
項目	よくできたと思うところ	改善が必要なところ、こうすればよかった
指導計画通りに進めることができたか		
	理由	理由
今日の実践は、自分が立てた保育のねらいを達成できたか		
	理由	理由
その他 ・ほかの人の発表と自分の実践を比べて感じたこと ・以前にその年齢の子どもの前で実践した時と、今日の自分の実践を比べて感じたこと		
	理由	理由

また、自らの振り返りを次の保育へと生かすため、模擬保育に使用した部分実習指導案に振り返りから見出した改善点を赤字で記入させ、振り返りの表と共に改めて提出を求めた。(資料4)

【資料4】改善点が赤字で記された指導案の一例 (Aさん作成)

保育内容・概要			
部分実習指導案			
おとこは誰だ？クイズ の指導			
12月 4歳児			
ねらい: お金に興味をもつ言葉を使う喜びを味わう。			
時間	環境構成	予想される子どもの活動	保育者の援助活動および指導上の留意点
00:00	①クイズ お宝の宝	・お金を手にする。 ・お宝の宝、お宝の宝を呼ぶ。 ・お宝の宝。	・クイズ導入して意欲を引き出す。 ・教室中に「お宝の宝」の声が響く。 ・金額の大きい声。 ・100円を最も多く出した子が優勝。 ・お宝の宝。
	お宝の宝	・クイズ「お宝の宝」を聞きながら、お宝の宝を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音を聞きながら、お宝の宝を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。
	お宝の宝	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。
	お宝の宝	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。
	お宝の宝	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。
	お宝の宝	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。
05:00	お宝の宝	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。	・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。 ・お宝の宝の音に反応して、「お宝の宝」を呼ぶ。



## 5. 模擬保育の振り返りに見る学生の気づき

学生が自らの模擬保育を振り返り、振り返り表（資料 3-①②）に記述した内容を見てみると、自分の言葉がけの未熟さや不足などへの反省や子ども役が示した反応への対応の難しさ、環境構成の不備、準備不足等についての記述が多く見られた。これは、自らが実践してみて、また他者評価でも「できているか否か」が判断しやすいからであろう。このような考察は保育内容総論の授業において模擬保育を取り入れ、学生の学びについて検討した上月（2019）<sup>6)</sup>の研究にも見られる。また、模擬保育後に部分実習指導案に加筆された改善点もそれらについての記述が多く、保育の流れをよりスムーズにするための改善点については多くの学生が気づくことができたと言えるであろう。

しかし、今回、領域「言葉」の指導法の一つとして取り上げた「言葉に関する発達の理解と保育実践のつながりの意識」という点では模擬保育の振り返りから改善点を見いだせている学生はほとんどいなかった。その理由としては、模擬保育が計画した実際の年齢の子どもではなく、大人である学生を前にして実施したことで、自らの保育実践を対象とした子どもの発達段階を視点にして振り返ることが難しかったことが考えられる。模擬保育の効果は子ども役となる大人の反応がカギになると指摘する先行研究<sup>7)</sup>もあり、この点についての検討と改善については今後の課題としたい。

## 6. 今後の課題と展望

本実践を通して、模擬保育後に自らの実践を振り返る機会を得ることは学生に保育を改善する視点を身につける学びとして有効であることが分かった。しかし、今回は保育者役として模擬保育を行えたのは授業時間の都合上、一人1回だけであり、1回の実践では振り返りから得た改善点を生かし再検証することができない。また、1回の実践、振り返りだけでは気づく改善点も視覚的で気づき易い点に留まり、保育にとって重要な子どもの発達や興味、反応に合わせた指導法や援助という視点での改善点の獲得には至らないということも今回明らかとなった。そのため、保育を改善する視点をより深めていくためにはこのような機会を積み重ねていく必要があると考える。

そしてまた、模擬保育後の振り返りだけでは言葉に関する発達の理解と保育実践のつながりについて学生が理解できていると言える段階には至らなかった。学生自らが養成校での学びの中で得た理論的な知識と実際に子どもを目の前にした時の保

育実践がつながりのあるものでなければならないということを学生が理解するためには、保育者養成課程における一つ一つの科目を単独のものとして存在させるのではなく、学生がその連続性やつながりを感じながら学びを積み重ねていけるようなカリキュラムマネジメントが重要になってくるであろう。特に、今回の保育内容「言葉」における模擬保育では「言葉」という特性から言語表現を伴うペープサートやパネルシアター、歌や手遊びなど領域「表現」にも関わるような教材や保育技術を用いる学生が多く見られた。そのようなことから、領域「言葉」と領域「表現」にはカリキュラムマネジメントによって学生の学びを深める可能性があると言えるのではないだろうか。

さらに近年、保育現場においてはポートフォリオやドキュメンテーション等のICTを活用した保育記録の作成が行われており、これからの保育者養成においては①学生の学びを深めるための教員によるICTの活用、②学生が学びを深めるための学生によるICTの活用、③幼児の学びを深めるためのICTを活用した幼児の活動、という3つの点から授業においてICTを活用することが求められている。<sup>8)</sup> 今回の実践では言葉の発達過程と子どもの言葉を育むための援助方法について学ぶ講義において映像や視聴覚教材を用いて子どもの姿や保育事例を提示した。これにより、学生が保育場面を具体的に想像できたものと思われ、保育者養成におけるICTの活用の①については実践し効果が得られたものと考えている。しかし、模擬保育においてICTを活用したり、改善点も含め指導計画にICTの活用を取り入れたりする学生は一人もおらず、現段階で学生たちは保育にICTを活用することの効果の実感や技術の習得ができていないと言えるであろう。

今回の実践を通して見えてきたカリキュラムマネジメントの必要性や学生が保育実践の中でICTを活用できる力を養成していくことは実践的指導力のある保育者を養成するための重要なポイントになるものと思われる。その点も含め、保育内容の指導法の有効的な在り方について今後も検討していく。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領』
- 2) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針』
- 3) 内閣府 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
- 4) 文部科学省幼児教育部会 (2016) 「幼児教育部会における審議の取りまとめについて (報告)」

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm)

- 5) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会（2017）「平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」
- 6) 上月智晴（2019）「保育内容総論における模擬保育と学生の学び」京都女子大学教職支援センター研究紀要第 1 号 p.15 - 27
- 7) 林富公子（2017）「「子どもの姿」を理解すること：乳児保育Ⅱにおける模擬保育の概要を通して」夙川学院短期大学教育実践研究紀要 11 号 p.48 - 59
- 8) 前掲書 5) p.32